ジョイス文学の「肝」は何か

『ユリシーズ』と『フィネガンズ・ウェイク』における様々な読みの可能性を探求

道木一弘

田村章 著
▶ジョイスの拡がり
インターテクスト・絵画・歴史
3・17刊 四六判314頁 本体3500円
春風社

ダブリンの青い空を背景に、額縁に入ったタイトルが浮かぶ。本書のコンセプト「拡がり」を視覚的に表す鮮やかなカバーデザインである。田村はこのコンセプトを三つの領域、インターテクスト、絵画、歴史、に分け、ジョイスの主に『ユリシーズ』と『フィネガンズ・ウェイク』における様々な読みの可能性を探求している。これら三つの領域はそれぞれ複数の論文から構成されているが、ここでは特に『ユリシーズ』に関わる論文を中心に取り上げる。

先ずはインターテクスト。言うまでもなく、ジュリア・クリステヴァの言語理論を背景に1980年代から90年代にかけて文学研究を席巻した言葉である。個々の作品は作家のオリジナリティーによって無から創造されたものではなく、言語のネットワークを介した「相互引用」(intertextuality)によって生成されるという考え方であり、バフチンの「対話」(dialogic)という言葉とならんでジョイス作品を分析する上で重要なツールとなった。文学理論の「ブーム」が去ったかにみえる今では忘れられた感があるが、もちろん、インターテクストのツールとしての意義は現在でも失われてはいない。むしろクリステヴァやバフチンの名を意識する必要もないほどに一般化したのである。

田村がこのツールを使って最初に分析するのは、『ユリシーズ』第十挿話とトマス・カーライルの『衣装哲学』との係わりである。たとえば挿話の始めに登場するコンミー神父が国会議員夫人の高価な衣装に示す敬意は、彼の宗教家としての堕落を表しており、それはカーライルが考えた「人々をつなぐ」ための衣装とは似て非なるものである。ヴィクトリア朝を代表する稀代の思想家にとって、肉体を含めた「衣装」にこそ人間社会の本質が現れるのであり、それに従えば、コンミー神父は神を見失った「えせ聖職者」ということになる。ただし、著者によれば、カーライルが衣装の背後に神の存在を見ていたのに対して、ジョイスのダブリンには神を見出すことはできない。その意味で、第十挿話は、カーライルの『衣装哲学』を換骨奪胎したものなのである。

続いて絵画。田村自身も認めるように、ジョイスと音楽の係わりを扱った著作・論文は多いが、絵画となると極めて少ない。また、これまでの研究においては、ピカソに代表されるキュビズムとの比較が中心であった。著者はこうした空隙を補うかたちで、『ユリシーズ』の特定の場面と視覚芸術の対比、印象派の絵画との比較、そしてアイルランド絵画と『ユリシーズ』の係わりを探求する。とりわけ注目に値するのは、アイルランド初のキュビストとされるメイニー・ジェレットの紹介である。評者も含めて、この女性画家の存在を本書ではじめて知る方も少なくないのではないだろうか。アイルランド文芸復興運動に深く関与し、『ユリシーズ』の作品世界にも登場するジョージ・ラッセルによって厳しく批判されたというジェレットは、しかし、ジョイスの作品を深く理解していたという。

面白いのは、ジェレットが自らの著作の中で、キュビズムと『ケルズの書』の構成原理に共通するものを見出していたことである。ジョイスの手法と『ケルズの書』の係わりは、既に鶴岡真弓らによって指定されているが、そこにジェレットを加えることで、ジョイスとキュビズムの関係性をより歴史化した視点からとらえ直すことができるように思われる。ただ、一つ不思議なのは、本書がジェレットの著作の中にジョイスへの言及があることを指摘しながら、その引用もなければその内容に関する著者の分析も書かれていないことである。

また、絵画との係わりに関していえば、木ノ内敏久が『ジョイスと視覚芸術』(英宝社、2012)において、キリコとジョイスの比較等ユニークな議論を展開していることを指摘しておく。

最後は歴史である。著者は、『ウェイク』のテクストでは、様々な歴史の断片、異なる文学作品、さらには映画やテレビのようなジョイスの時代にはまだ黎明期にあった新しい技術が地層のように堆積しているとし、それを「カオスとしての歴史」と呼ぶ。この指摘は受け入れやすいものであるし、様々な作品が融合する事態は正に本書の冒頭で指摘されたインターテクストとも係るだろう。その上で、あえて問題点を挙げるとすれば、「ママルージョ」と呼ばれる四人の歴史家が、歴史家としての資格を欠いているとし、その一つの理由が歴史記述において公私を混同しているためとされる点である。ここで細かな議論をすることはできないが、公の歴史に対するアンチテーゼ、そこから締め出された声なき者の声を聴き取ることこそジョイス文学の肝ではないかと思うが如何であろう。

ところで、本書には多くの絵画や著者自身が撮影したダブリンの風景が豊富に収録されている。絵や写真を介して「ジョイスの拡がり」を視覚的に味わうことができるのも本書の魅力であることを付け加えておきたい。

(愛知教育大学)

SHAKUJISHORIN
詩歌句集古書専門
tel 03(3995)7949
石神井書林 ★戦前の詩歌集雑誌高価買入
★在庫カタログ発行
〒177-0041 東京都練馬区石神井町6-8-3